

非人小屋に収容された野非人に元佐渡奉行石谷清昌（勘定奉行）が目をつけ、人手のたりない佐渡金山の水質人足に使うことを考えた。しかし佐渡奉行が治安や風俗を乱すとして反対したので、安永七年（一七七八）試みに六〇人を送った。結局、水質人足は望んで仕事ができなかったため、他にやる人足もいないので、そのまま無事非人の強制労働（常陸二〇〇人）が続けられた。これがおそらく、囚人労働の制度と続く鉱山労働の源れとなり、といったと思われる。しかし、享保一八年（一七三三）には江戸で最初の打ちこわしが起こり、天明七年（一七八七）には大打ちこわしが起こっている。大阪でも明和五年（一七六八）に打ちこわしが起こっている。

これらの打ちこわしの中心は日雇やで、ちや
行商人、無業者だったのを、幕内は寛政二年へ一
七九〇の石川島に人足、跡屋を作り、無業者を収
容し、養生のために、技術を習ばせようとした
が結果、人の換かるしんどい仕事へお替りや土

これと今のは同西條支那のある西津御前との向
係はまだよくわからないのでいみじく報告する。

いつの時代にも非人は再生産されて増大して
いった。エタと重い、出生による再生産はな
くて、マキンや経済的不況によつて落ち込む人
間の数にまじりとして非人部落が存在している
現在は法的身分制こそどりのぞかれ、非人とい
う身分はないが、相変わらず山岳、窪地、端は世
のほみだし者とされ、一方しんどくて、汚れる、

のと反対に、ノミ風気中心とし
て健々活況を呈して来ている三
角公園で、「愛知県無縁仏慰
養所」なるものかとり行なわれ
た。主催は西成愛護会、関係
者は市立更生相談所、西成好
童福祉、大阪社会医療センタ―
西成部、民生委員など。

方)をこの人足部屋の人足にやらせるようになつた。この迎のことは山本周五郎著『さぶら』によく書かれてゐる。

館ヶ崎ドヤ街の起りも江戸初期である。文和五年（一六一九）大阪町奉行が公許旅人宿設置ヶ所として大阪市内二ヶ所の一ヶ所として許可した名護町（長町）が始まりといわれている。名護町はその後寛文三年（一六六三）に出稼者の木賃宿の許可（三〇軒）をとって軒敷者を定め、ゆるぎなくなり、更に、大阪の町にたむろしていた乞食・非人（浮浪者）が天王寺にスラムをつくつていたので、それをたちのかせて、飯の木賃宿を許可して（二〇軒）泊めたことにより、大阪でも最下層のドヤ街となつていき、明治になると大量の貧民が流入して一大スラム、ドヤどまりした。それが今の釜ヶ崎に移つたことやいろいろな話はまた次の機会にしよう。

今の釜ヶ崎は江戸時代芝田へ大正の中頃まで
この姿だったようだ。いつ、なぜ、芝田になっ
たかまだ知らないと呼べれば非人跡場だった。

さけんは、安くて、不安定な単純労働をします。すやうされているように覚えてしまったが、以後、明治・大正・昭和と労働者の歴史を述べていくわけだし、そろそろ「労働者」の輪廓を述べてくるだろう。

なお、加へた資料は、誰でも手に入るようなものしか引用していない。図書館にいかなければ見れない資料に因してはあとで、文献資料一覽として発表します。

以上、前編終り

（乞、由四荷、改入）

展して何時からおまるのやら、ウロウロ。もちろん、この日は
 どう形式でやるのやら、わから
 ないままに、ともかくアリと
 出かけて見たが、まず、その肥
 田祭に田中角栄の天皇はんでも
 御列席なさるのか、と一顧慮わ
 せるような警備隊が目についた。
 南海線沿いの道端に御座堂が
 五、六人。公園の内には御座堂
 ありは、平日頃大きな旗して店出
 ししているノミ屋は影もなし。
 世と変わりあるのはそればかり
 でなく、夏祭りや節冬で、ノド
 白湯太鼓の相おれるユシワリ
 しのの台の上に、なにやら祭
 壇らしきものがシツワレ、果
 白の幕をうれ、テントが一張り

五、六人。

内に口絶

白の幕をうれ、テントが一張りコ

ところを注意諸兄よ、最近新聞紙上などでもあまり目にしなくなつた。労働者なる言葉がここに立ち現われてゐることに、奇異な感を覚えられますか。なほ、労働者。なる言葉を便うか。まづは次なる朝日新聞の記事中へ――一月一四日付朝刊――よりの引用を御覧下さい。

められること(12)はく他界され
たことを思うとき、事恨の念
にたえまじと述べる、す
集まつた労働者の中から、す
すり泣きの声もれた。『
まぎつた労働者の中から、
すすり泣きの声もれた。だつ
て。祭壇の左側、幕の裏にはい
つものようにフトンにくるま
て二人の人が寝ていた。生き甘
から熱煙を牽じられてゐる彼ら
の姿が、幕の風に揺うたびに頃
回見えるのに、片山なる男の言
葉に對するものかゝるか、焚火
のまわり居た人達は聖堂の参
加者ではない。彼らは昨日も焚
火を囲むのに集まつていたのだ
から。ならば、集まつた労働者
というのは、テントの中の椅子
に座掛けていた人達のことか。

テントの中からは、暖かきスル音が聞こえた様な気がする。若しそれが、片山なる男の笑聲に包まれるススリ並きとするならば、そしてテントの中の人達が、静かに呼称されるのなら、事の裏で寝ていた人達や火を囲んでいた人達は、自らをこれらの輩と区別する内に、自分達の呼称として非常なる言葉を新めて運び取るさあろうと信じる。

厳しい冬を前に静かな者は、形式に拘束する。厳しい冬を前に静かな者は、静かな者の形式などには目もくれないが、たゞ静かな者は静かな者の形式をもつて静かな者を静かに、静かな者の冬を、静かな者の冬に作るにろう。

(マシ語)

勞務者健康調查報告

肺結核編

中原哲也

「もし個人が、他人に肉体的な傷害を、しかも被害者が死に至るほどの傷害を加えるならば、われわれはそれを傷害致死とよぶ。もし傷害者が、その傷害が生命にかかわるだろうということを予知していた時には、われわれは殺害の行爲を殺人とよぶ。けれども、もし死者が、何となく、アロレタリヤを、彼らが不時の不意無死に

すばれち剣や弾丸による死と同じく、
力的な死に、必然的におちいるような、そうい
う状態におくならば、また、社会が、何千の人
々から必要な生活条件をうはい、彼らを生きご
うけ、ひいような状態におくならば、また、社会
が、法律という強力な腋によつて、この状態の
当然の結果たる死の訪れるまでこの状態にとこ
まることを、彼らに強制するならば、また、社
会が、この何千の人々がこうした諸条件の無き
になるに違いないということを知りすぎるやうに

知つていながら、これらの条件を存続させる可
 うば——これは、まさしく個人の行ふと同様
 に殺人であり、ただそれが隠蔽された種類の殺
 人だというだけである。それはだれもが防ぐこ
 とのできない。何ら殺人とはみえない殺人であ
 る。というのは、殺人者は目にみえないからで
 あり、すべての人がこの殺人者であり、しかも
 また、だれもそうではないから、無性者の死な
 ず、自然死のように見えるからであり、そして、そ
 の殺人は、故意の罪であるよりむしろ、不意
 死の罪であるからである。しかしそれは、さ
 して殺人である。……

すいふん長い引用になつたが、これに正しくこれはどの處をえたコトかで日々讀者の心で死んでいくへい寫されていく人々であらうした人が本があつたらうか人の名はエングルスその本の名はマルクスにおける唯物史觀の狀態この本の寸草らしきについで別の書物に於けるものか其の二つは口しりアートの未來の地に包ま